



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	なぜだろうか：白老でプロニスワフ・ピウスツキの記念碑が除幕されるわけ (A.F.Majewicz, “Why? Unveiling a Monument to B.Piłsudski in Shiraoi.”)
Author(s)	マイエヴィチ, アルフレト F.; 井上, 紘一//訳
Description	日本語訳と, 元の英語発表原稿を掲載しています。日本語訳(20/10/2013)英語版(20/12/2013)。この英語版は発表後に増訂されたもので、発表前に準備された日本語訳とは一部異なる場合があります。Here are published: Japanese translation (20/10/2013)original English-language version (20/12/2013). Appendices are revised version after the lecture. They are partly different from the earlier Japanese translation.
Relation	「ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事：白老における記念碑の序幕に寄せて」研究会報告集 全一冊 「ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事：白老における記念碑の序幕に寄せて」研究会報告集. 2013年10月20日. 北海道大学学術交流会館. 札幌市 主催：北海道ポーランド文化協会, 北海道大学スラブ研究センター. 共催：グローバルCOE プログラム「境界研究の拠点形成」. 協力：駐日ポーランド大使館, ポーランド広報文化センター
Issue Date	2013-10-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53486
Type	conference paper
File Information	07Majewicz_rev.pdf, Japanese translation



なぜだろうか〜 白老でブロニスワフ・ピウスツキの記念碑が除幕されるわけ

アルフレト F.マイエヴィチ
井上 紘一 訳

文明は人類の所産である。実際のところ、各個人は——短い生しか持てずに夭折するか、巷との付き合いを一切拒否する人たちでさえ——、ほとんど例外なくそこへ参与・貢献する。われらの頗る微妙な感情や極めて深甚な経験の小品を形作り、またこれらを研ぎ澄ませてもくれるのは、彼らにほかならぬからだ。個々の貢献は、天賦の才能や技量、能力や潜在能力、性格の特徴、状況などに左右されてはいるが……。

それら個人の間には、幸運にも上述した諸要因のすべてに恵まれて、より多くの寄与をなすか、あるいはそうすべく運命づけられた人たちもいて、社会は彼らの功績を、人々の集合表象の中に不滅の記憶として刻み込んで、社会遺産となすことを決断するか、顕彰することを選択する。彼らの貢献は生き続け、大切に記憶され、これら貢献者の物理的不在にもかかわらず社会に奉仕し、彼らの名前が歴史の年代記に刻印され、彼らの伝記や肖像は、各種の便覧や百科事典などの該当頁にも登場する。貢献者の幾人かは、彼らに関する集団的記憶が常に更新され、生き続けるべく、格別な記念碑を建てるに値する人物として認められる。

力づくで押し付けられた偽の記念碑は——偽の「偉大さ」をめぐる真実が、平和裏ないし暴力的な形で勝利する瞬間に、幸いにも破壊されるまでは——、間違いなく増殖することができる。サハリンを代表する彫刻家ヴラデーミル・チェボタリョフが重い斑癩閃緑(はんれいせんりょく)岩でこしらえたブロニスワフ・ピウスツキの石像は、サハリン州の人口 20 万を擁する州都ユジノ・サハリンスクの中心部に立てられた。それはまさに、レーニン、スヴェルドロフ、ジェルジンスキーなど、 коммуニストの「偉人

中の偉人」たる偶像の記念碑が、いまだ存命中のソ連邦や、不本意ながらもそれと「兄弟的」盟約を結んだ国々——モスクワやワルシャワも含む——の領土内では、軒並みに打倒されていた頃のことである。この関連では、「ピウスツキ」という名前それ自体が、1920 年のポーランド・ソ連戦争においてブロニスワフの弟ユゼフ・ピウスツキがもたらした赤軍に対する勝利のせいで、「ソ連圏」では最高度の慎重を要する案件だった事実が想起されてしかるべきだろう。

では上記の出来事がどうして可能となり、またブロニスワフ・ピウスツキの記念碑は、なぜサハリンで建立されたのだろうか。

この件では、次のような展開が決定的な誘因だったと思われる。まず、それは疑いもなく、ゴルバチョフの「グラスノスチ」、「ペレストロイカ」政策が先導したソ連の外交から内政にわたる思い切った転換であって、それがサハリン島に対するアクセスを可能とした。次に、これもまた疑いのないところだが、大阪の国立民族学博物館の傘下で、北海道大学が中心となって推進した ICRAP—International Committee for the Restoration and Assessment of Bronisław Piłsudski's Work の頭文字を連ねた略語ながら公称——と銘打つ国際的研究プロジェクトである。ICRAP の主要な目的は、エディソン方式の蠟管に保存されたアイヌ語とアイヌ・フォークロアの、初めての——したがってまた最古の——音声記録の内容を復元し救出することにあつたが、この採録を 1902-1903 年にサハリンと北海道で——そしてまた白老においても——実行したのは、ブロニスワフ・ピウスツキその人にほかならない。当初は極めて不確かだった企てに、少なく

とも確かな結果を確保すべく、さらに二つの目標がプロジェクトに付加される。即ち、1) 散逸したピウスツキの[既刊・未刊行]著作を博搜して、アイヌを論ずるかアイヌに関連する作品を、『著作集』の形でグローバル・アカデミズムへ提供すべく英文で公刊する、2) 関心を共有する学者たちと一堂に会して、成果や失敗、またそこから生ずるさまざまな結論をめぐっても討議する機会を設けるため、国際会議を開催する、がそれである。蠟管の収録内容復元の試みが、たとえ不首尾に終わった場合でも、遭遇した諸問題や、失敗の原因をめぐっては、依然として議論ができることを想定したわけだ。

ピウスツキが収録した内容の復元結果は、予想された成功率 2%を上回り、計画された国際会議は 1985 年 9 月 16-20 日、「B.ピウスツキの録音蠟管とアイヌ文化に関する国際シンポジウム」と題して北海道大学で実施された。会議には 10 カ国——カナダ、中国、デンマーク、フィンランド、ドイツ、イタリア、日本、ポーランド、ソ連、米国——から 148 名の学者や研究者が参集して、アイヌやアイヌ文化をテーマとする然るべき規模の「国際会議」としては、事実上初めてのものとなった。

このプロジェクトには、日本のマスメディアから関心が寄せられ、やがてそれは国外へも及んでいった。北海道新聞はその進行状況を日常的に報道し、分岐点やその瞬間を逐一記録し、のちにはプロジェクトに関する一般書も上梓している(先川 1987)。NHK は 2 本の記録番組を制作する。一つは「NHK 特集」シリーズの「ユーカラ・沈黙の 80 年～樺太アイヌ蠟管秘話～」、今一つは教育テレビ「ETV 特集」シリーズの「カラフト・アイヌ望郷の声」で、いずれも山岸嵩の作品である。山岸はまた、国語教科書の「言語と文化」の節に向けて、ピウスツキ蠟管と収録内容復元の試みを伝える 17 頁の読物を執筆して、この話題を日本の生徒たちにも届けている(山岸 1990)。今日では、ブロニスワフ・ピウスツキにかかわるドキュメンタリー・フィルムが 13 本に達する傍らで、彼とその資料に関する出版物の件数は千点を超えており、その多くは ICRAP の研究プロジェクトに淵源する。

ピウスツキの印象的な民族資料コレクション

ンをめぐっては、あまたの図録が上梓されており、これらのコレクション、あるいはむしろその一部を対象として——各コレクションは大半が大き過ぎて、一度には展示できないそうである——、幾度となく展覧会が催され、奇跡的に生き残った録音蠟管の技術的雑音の狭間から聴き取れるアイヌの歌の調べは、札幌の子供たちにミュージカル上演すら鼓舞するに至り、その中で歌われる「ピウスツキ・オジさんの蠟管から聞こえる」すばらしいお話を讀める歌——その歌詞と音符については CWBP 3, 789-90 を参照されたい——は、暫くの間、北海道中の生徒たちが口ずさんでいた。

ICRAP プロジェクトの反響はサハリンにも届いた。そこではブロニスワフ・ピウスツキが学者として、また島の卓越した探検者としてもよく知られ、高く評価されていて、南サハリンの一山は彼の名前すら冠されたから、「ピルスツキー山」は各種の地図に明示されている。つい最近までは事実上サハリン州の全域において先導的な文化・教育・学術機関だったサハリン州郷土誌博物館は、彼のコレクションを同館の蔵する根幹資産として慈しみ、彼とリエフ・シュテルンベルグを同館創設の父と見做してきた。ユジノ・サハリンスクの博物館と、600 キロほど北にある都市型集落ノグリキの分館において、ピウスツキとその遺産をめぐる第二回国際会議を開催するというアイデアが生まれたのは、まさにこの博物館においてであった。そのアイデア自体が当時としては空想科学小説(SF)のように聞こえた。サハリン州の全域はつい先頃まで「閉鎖」されていて、外国人にとってはほとんど完璧な立入禁止区域で、通常のソ連人ですら、米国の上院議員 1 名を含む乗客と乗員 269 名が搭乗する韓国航空のジャンボジェット機が、1983 年 9 月 1 日に躊躇なく撃墜された事実までも了解の上で、特別な許可を得て渡航することができたからである。しかしながら、「ブロニスワフ・オシポヴィチ・ピルスツキーはサハリン原住諸民族の研究者」と名付けられた国際会議は、当局の承認を取りつけて、1991 年 10 月 30 日-11 月 2 日に実施された。決定的な論拠は、そのような第一回会議が日本で開催されている事実と、「サハリンとその発展

や繁栄に専ら寄与した人々の一人」であるブロニスワフの生誕 125 周年を祝賀することの必要性だった。

ドイツの思想家カール・マルクスはその 1845 年の「フォイエルバッハ論：第 11 テーゼ(*Thesen über Feuerbach*, These 11)」に「哲学者たちは、世界を様々に解釈してきただけである。肝心なのは、それを変革することである」と記していた。同会議はマルクスの件の公理を実践して、不可能なことを可能としたのだ。それは島の歴史で未曾有の、このような規模の初めての国際会議として、とりわけサハリンとロシアの学者たちに、また西欧・米国・日本の学者らに対しても、一堂に会して、相互の学術協力、人やアイデアの交換、そしてあまたの研究プロジェクトを触発させる機会を提供し、ひいてはサハリン州全域の外部世界へ向けての開放や、同州の人々の外部世界へ向けての開放に途轍もなく寄与したわけだ。

ピウスツキ生誕 125 周年を記念するサハリン会議のハイライトの一つは、サハリン州郷土誌博物館の前庭における彼の記念碑の除幕式であった。この建物はサハリン州の全域を通じて議論の余地なく最も美しい建造物であるが、貝塚良雄(1900-1974)の設計で、1937 年に樺太庁博物館として豊原に築造されたものである。ユジノ・サハリンスクは比較的短期間のうちに、ブロニスワフ・ピウスツキ研究のグローバル・センターとなり、博物館にブロニスワフ・ピウスツキ遺産研究所が付置されたあとは、専門家らが全世界から詣でるメッカとなった。同研究所は自前で高水準の『通報』を発行しているが、これは一人の研究者の伝記と遺産の研究に特化した、かなり希有な学術誌である。同誌は目下 16 号までが既刊であるが、そのほかにあまたの重要著作が、やはり研究所の支援で上梓されている。例えば、未刊行のピウスツキ遺稿を上梓した数冊、ピウスツキとリエフ・シュテルンベルグが取り交わした書簡集成 2 冊、彼の生涯のサハリン期を扱った浩瀚な伝記(Latyshev 2008)などである。

ここで強調すべきは、サハリンの同僚たちが自らの郷土の卓越する学者・研究者・探検者を顕彰・記念するばかりでなく、——恐らくは

それ以上に——共感～同情～憐憫といったピウスツキの個人的性格の傑出した諸特徴にも共鳴して、彼の記念碑を建立したという事実である。これらの特徴は、無私の精神で支援し、他者の利益のために行動し、また己の崇高な理想を堅持するためならば、己自身も、またたとえ僅かであれ己の持てる物まで、一切を犠牲にすることも辞さぬという稀有な性向や、その実践に当たっての腰の軽さを常に伴っていたからだ。

彼は、思いがけぬ運命の悪戯によって己が牢獄となり、また悲惨なる浮き世にもなった土地の原住民たちの研究に深く沈潜するわけだが、それは、己の興味の充足や知見の拡張もさることながら、第一義的には、これらの脆弱で、抑圧され、差別され、敗者と宣告された人々への心情的連帯感に発するものであった。彼自身の語りを以下に引用する。

十八年以上に及んだ極東における私の滞在は、強いられたものだった。私は故郷へ戻ることを常に希求しながら、己が囚われの身の追放者であること、自らにとって最も大切な人たちのすべてから切り離されていることの苦痛は、なるべく忘れようと努めた。したがって、私はサハリンの原住民たちに自然と惹き付けられていった。彼らだけが、その太古からの居住地であるこの邦(くに)に真の愛情を抱いているからで、そこへ監獄植民地を持ち込んだ人々はこの邦(くに)を忌み嫌っていた。全く異なる形の文明の侵入に当惑していた自然児らとかかわりを持ったとき、私はあらゆる権利を剥奪されて、生涯でも最悪の歳月にあったとはいえ、自分にも何らかの力と効用が具わっていることを知った。加えて、[...]私はいつも、個人と民族の諸権利の憎むべき破壊者らの仲間には加わらぬように生き、かつ行動すべく心がけてきた。私は、民族を異にする人たちと彼らの言葉で語り合うことに深い喜びを感じる[...]。人の精神生活にあっては、その母語が、有機体の生命に対する太陽の關係に匹敵することを、私は自らの心によって承知して

いる[……。太陽は生命に光を浴びせ、温める傍らで、その秘所を開示し、その深奥に隠された宝物を顕示する必要を感じさせて、そのようにも仕向けるからだ。いや増しに昂じてゆく生活の厳しさの故に苦悩するこれらの素朴な部族民らの心へ、ささやかな喜びや、より良き未来に対する希望をもたらすことは、私の欣快とするところである。戯れる子供らの心底からの笑い、親切な女らが目に浮かべる感涙、病人の顔が示す感謝の微笑み、賛意を告げる叫び声、あるいはまた良き友が喜びの印として肩を軽く叩く仕草、これらは皆、己が定め of 辛さを快く軽減してくれる慰藉であった(CWBP 2, 8-9)。

その認識は異なるとはいえ、われらが共有する悲慘、われらのそれぞれの故郷——われらの存在の揺籠——へ向けられた同様に真摯で熱烈な愛、これらすべてがわれらを結び付け、相互愛を育んでいった(CWBP 1, 144)。

ピウスツキ自身の書物のみならず、彼と偶々会って話す機会があった多くの人たちの証言からも、そして彼を知るか、またはその行動を観察した人たちの言説からも、彼がアイヌやニヴフの共同体にしっかりと根を下ろし、揺るぎない信頼を享受して、彼らの単なる一員と見做されたことは明らかである。これほどの厚遇を受けた外来者は、恐らく皆無だったろう。彼らが伝統的に保有し、また使用もしてきた猟場や漁場に対する権利やアクセス権が、ロシア人や日本人の征服者らに奪われて、十分な量の食料がほとんど確保できず、さらには彼らの生存自体の展望さえ危殆に瀕しているのを見出すや、彼は馬鈴薯の栽培や魚の塩漬けや牧畜といった、原住民らにとって全く未知の持続可能な新生業の導入に着手する。彼はまた、アイヌたちがロシア人や日本人らと悶着を起こしたときは、彼らの利害を代表しつつ陳情書を執筆し、原住民の見解を説明して、彼らの弁護人や代弁者としても振る舞った。原住民たちは、新しい支配者によって課された規則や法律で抑圧されているのに、規則や法律は彼らの理解を絶す

るものだったからだ。ロシアと日本の双方の当局者に向けて執筆された特別な覚書では、原住民の自治、教育、医療、社会・公共福祉をめぐる完璧に推敲を凝らした制度を提示していた。その有効性を例証すべく、彼は自らの時間をかなり割いて、傷や通常の疾病を治療し、彼自身が創設した[識字]学校のために地元の教師たちも自らが養成した。これら学校の設置は、ロシア皇帝が指示した原住民人口調査を自らが請け負う代わりに、サハリン島武官知事から取り付けた資金で賄われた。彼は、当時のサハリンにいたシャマンの全員と個人的面識を有しただけでなく、彼らのほとんどは彼を親しい友、腹心の友と、また敬語的な意味での「兄」とさえ見做した。アイヌらがピウスツキに寄せる信頼は絶大であって、無限のようにも見えたが、彼らは彼をほとんど全知全能と考えていた。アイヌ自らに語らしめよう。

村を目下管理するのは日本人で、今のところアイヌはそれに参加せず、また同意も与えていません。[……。日本人らは、バフンケとモニタフノの持物だった海辺の小屋を押収し、所有していますが、兩人には代わりの漁場を全く与えていません。[……。アイヌに教える者は誰もいません。[……。今は村長(スタロス)を務めるバフンケは、[……。このような実情を訴えるために上京しました。わしらに慈悲をください。鵜城(ウソロ)の近くには鰯の良い漁場があるそうです。もしあなたがそれをロシアのツァーリから貰って、わしらへ渡してくれるならば嬉しいです。そうすれば、わしらが人々を遣って、そこで魚を獲られますから。[……。わしらに慈悲をください。わしらが鵜城近くの漁場を手に入れられるよう助けてください。[……。以前にお伝えしたように、もし日本人が漁具を管理するのならば、わしらの村の衆は嘆くことでしょう。彼らはわしらが岸で網漁を行うことを許しません。[……。今は、アイヌが日本式生活を選ぶよう望む日本の役人らのせいで、より難しい状態ですが、全く違う生活様式を直ちに受け入れることにアイヌは抗っています。彼ら

は、わしらがたくさんの魚を獲ることや、岸辺で網漁をすることを禁じています。それはまことによろしくない。[…]わしらに慈悲をください。ロシアのツァーリには、シベリアにわしらの漁場を三つほど下さるように頼んでください。わしらの村には良い漁場がないからです。入江の向こう側には良い漁場が幾つもありますが、そこを取り仕切る日本の有力漁業者がすべてを握っています。[…]わしらに慈悲を垂れて、直ぐに返事をください。[…]わしらに慈悲を垂れて、わしがシベリアで二つの漁場を貰えるよう、どうか助けてください。日本人たちですら、わしらを気の毒に思ってくれますからに。もしあなたが、ロシアの役人たちとロシア語で話してくだされば、彼らはたとえちょっぴりでも、わしらを助けてくれるでしょうから、わしはたくさんお礼を言うし、幸せでしょう。[…]もし漁場が[…]カムチャツカであっても、一向に構いません(CWBP 3, 723-27)¹。

ブロニスワフは、アイヌ娘との結婚によってアイヌの共同体に仲間入りし、二児の父親となった。彼がアイヌの家族を置き去りにしたという非難は、現存する記録による限り正確でないことが判明する。彼は人身の自由が回復されたとき、己の家族を引き取るという特別な目的でサハリンに戻った——彼の申し出を断ったのはアイヌの側であった——が、のちになっても、自分の家族の許に戻るべくあらゆる努力を重ね

ねていた——その当時の最も偉大な学者の一人だったフランツ・ボアズは、彼がサハリンと北海道へ赴いてアイヌ研究の継続を可能とすべく、資金の調達に尽力した²。

ピウスツキの学界全般に対する寄与、そしてアイヌやアイヌ語やアイヌ文化に関するわれわれの知見への寄与は、公刊のほとんど直後に認知されていた。彼の著作は鳥居龍蔵、知里眞志保、和田文治郎、和田完などの学者によって日本語へ翻訳されだして、金田一京助や村山七郎によって称賛された。ボアズは 1908 年、彼の資料の価値を「それについて私の承知する限り、この種の資料が今後再び現れることは甚だありそうにないと私はかなり確信している」³という表現で特徴づけていた。50 年後、ピエール・ナエール(1958:37)はピウスツキの *Materials...* について「樺太アイヌ語のテキストは採集地が明記され、ルスロ神父⁴の協力を得て考案された表音法にもとづく記述は秀逸であって、実際に[…]樺太方言に関するわれわれの知見にとっては最善の典拠である[…]」と記している——リンドクウィスト(Lindquist 1960: 8)はこれを「私が詳細な書誌として PN(ピエール・ナエール)の著作に言及するように、ここでは敢えてただ一冊の著作、ブロニスワフ・ピウスツキの 1912 年刊 *Materials...* のみを掲げておく」⁵と強調するが、70 年後には、著名な日本学者で、アイヌ語(ユーカラ)、琉球語(おもろさうし)、上代日本語(712 年の古事記)の英訳者でもあるドナルド L. フィリップパイ(Philippi 1979: 18)が「樺太アイヌ語やフォークロアを研究する場

¹ これは千徳太郎治がピウスツキに宛てた手紙の一節で、幻の「アイヌ文語」で記されている。これら 3 通の手紙については、アイヌ語テキスト・逐語訳・自由訳が公刊されている(丹菊逸治・荻原眞子「千徳太郎治のピウスツキ宛て書簡:「ニシパ」へのキリル文字の手紙」『ユーラシア言語文化論集』4: 187-226, 2001) が、マイエヴィチ氏の英訳は自前のテキスト解釈にもとづいているから、ここでは敢えて同氏の英文稿から邦訳してある——訳者。

² ブロニスワフ・ピウスツキの浩瀚な伝記(Sawada and Inoue 2010)は「プレプリント」として埼玉大学から上梓された。

³ アメリカ自然史博物館のパトロン、アーサー・カーティス・ジェイムス宛の 1908 年 6 月 6 日付ボアズ書簡。フィラデルフィアのアメリカ哲学協会文書庫蔵。ここでは、Inoue 2003: 159 から引用。

⁴ Jean Pierre Rousselot (1846-1924)は実験音声学の開祖の一人。代表的著作は“Phonétique d'un groupe d'Ainos” (*Revue de Phonétique* 2 (Paris 1912), 5-49)。ピウスツキは、著作に使用するアイヌ語テキストの表記法に関して、ロンドンでルスロから直に指導されている。

⁵ 表記法の違いによって、Piłsudski 1912 が外国語による唯一の出典であるような書誌は、なかんずく日本語の出版物に頻見される。

合、それは最重要の作品である」という見解を踏襲した。1912年の *Materials...* は寸毫の疑いもなく、世界的学識の中でそのような意義と重要性を有する諸著作の間に列せられるべきである。それは樺太アイヌの口承文芸やその言語に関する究極の典拠と見做されており、またそのように見做され続けるであろう⁶。

サハリン人たちはブロニスワフ・ピウスツキを、自らの島国へ格別に偉大な奉仕をなした人物として、しかと定まって永続する世界的名声を博する学者として、また有徳・有価の男としても顕彰すべく、彼の記念碑を建立した。しかれば、日本人やアイヌの人たちは、そして北海道と白老の人たちは、なぜ同じことをすべきであるのか。彼らは果たして、そうすべきなのだろうか。

大義名分はサハリンの場合とまさに同じである。ピウスツキは確かに、北海道を探検することも、また同じような程度と規模でその発展に寄与することもなかった。だが、彼にはその機

会が与えられただろうか。ピウスツキとヴァツワフ・シェロシェフスキを *persona non grata* (好ましからざる人物) と見做し、調査の開始後ほどなくして、彼らに退去勧告を突き付けて、首尾よく去らせたのは、日本人たちであった。シェロシェフスキはヤクート[現サハ]人に関する著名な専門家で、のちに多作の作家となったが、1903年の夏には両名が北海道アイヌを調査すべく来道していた。しかるに、そのような状況下にあっても、北海道と日本のことがピウスツキの諸著作に欠落するわけではない。今は日本で暮らす彼の子孫たちはここで生まれている。二人の学者が北海道でフィールド・ワークに着手したのは白老からであるが、その踏査行は、今や世界中で認知されている旅行記⁷をも生み出した。ピウスツキの遺産は、やはりアイヌの、白老と平取の、北海道と日本の遺産である。そしてまたロシアの、リトワニアの、ポーランドの遺産でもある。

⁶ 当該専門領域における同書の独創性や卓越性は、以下の3要因に求められる。

1) 同書が提供する資料は、樺太アイヌがいまだ独自の生活様式・習慣・儀礼・言語・伝統を堅持していた頃に集積されたすべてのフィールド・データの間で、最も豊かであり、最も周到に採集されたものである。上記の伝統文化は、特殊な雅語を介して、特定個人の記憶に保持されたものを若い世代が受け継ぐ形で伝承されてきたから、全員が周知すべきものではなかった。同書の著者はまた、彼らの生活の浮沈のすべて、祭祀や儀礼などにも能動的に参与する傍らで、彼の言語運用能力は熟達・完璧であった。

2) 同著者は幸いにも、当時のポーランドで望みうる最良の校訂者二人の下で、編集作業を進めることができた。一人はヤギェウォ大学教授のヤン・ロズヴァドフスキ(1867-1935)、当時の最も優秀な言語学者の一人で、1904年にライプツィヒで上梓された古典的著作 *Wortbildung und Wortbedeutung* の著者である。今一人はヤギェウォ大学英语教師のミハウ・セヴェリン・ジェヴィツキ。彼は同書のメタ言語である英語を監修したが、ポーランドのアカデミズムにおける英語学の草分けの一人だった。

3) 樺太アイヌが、言語や文化を喪失し、彼らの四周に遍在する情け容赦ない日本人らに融合し、究極的には後者の間に埋没すべく猪突した民として、完全な文化変容を蒙る以前に、その水準や規模の双方で本書に匹敵しうような試みは皆無だった。

⁷ シェロシェフスキは1926年、彼らの1903年の踏査行をめぐって純文学作品を上梓する。同書はその後数回再刊されたが、英語・チェコ語・ロシア語にも翻訳されており、つい最近では井上統一による日本語版も登場している。

参考文献

(邦文文献)

- 先川信一郎『ロウ管の歌：ある樺太流刑者の足跡』札幌：北海道新聞社(1987)
シェロシェフスキ、W.、井上紘一訳「毛深い人たちの間で」[本書に収録]
知里真志保「樺太アイヌの説話(一)」『樺太庁博物館彙報』3/1、豊原(1944)
知里真志保「樺太アイヌの説話(一)」『説話・神謡編』(知里真志保著作集 1 巻)251-372、東京：平凡社(1973)
ピウスツキー、B.、北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会[藤村久和、他]訳「樺太アイヌの言語と民話についての研究資料」『創造の世界』46: 99-119; 47: 112-42; 48: 116-33(1983); 49: 134-47; 50: 118-39; 51: 98-118; 52: 134-64(1984); 53: 124-56; 54: 148-61; 55: 144-61; 56: 84-98(1985); 57: 104-13; 58: 140-59(1986); 61: 104-29; 62: 116-35; 63: 98-115(1987); 64: 96-113; 65: 120-35; 66: 120-27; 67: 98-129(1988); 70: 116-29; 71: 62-70; 72: 132-42(1989); 74: 112-22; 75: 138-50(1990); 77: 138-45; 78: 104-11; 80: 102-11(1991); 82: 108-19; 84: 136-45(1992)、東京：小学館(1983-1992)
和田文治郎「樺太アイヌに傳はる昔話」『北方日本』15/2: 100-07、豊原：北方日本社(1943)
山岸嵩「よみがえった《ロウ管》」、木下順二ほか監修『新版中学国語』2: 196-212、東京：教育出版(1990、1987¹)

(欧文文献)

- CWBP 1, *The Aborigines of Sakhalin (The Collected Works of Bronisław Piłsudski, vol. 1, edited by Alfred F. Majewicz)*, 819 pp., Berlin-New York: Mouton de Gruyter (1998)
CWBP 2, *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore (Cracow 1912) (The Collected Works of Bronisław Piłsudski, vol. 2, edited by Alfred F. Majewicz)*, 886 pp., Berlin-New York: Mouton de Gruyter (1998)
CWBP 3, *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore 2 (The Collected Works of Bronisław Piłsudski, vol. 3, reconstructed, translated, and edited by Alfred F. Majewicz, with the assistance of Elżbieta Majewicz)*, 924 pp., Berlin-New York: Mouton de Gruyter (2004)
CWBP 4, *Materials for the Study of Tungusic Languages and Folklore (The Collected Works of Bronisław Piłsudski, vol. 4, edited by Alfred F. Majewicz, with the assistance of Mikhail Dmitrievich Simonov, Larisa Viktorovna Ozoliņa, Tatyana Bulhakova, Elżbieta Majewicz, Tomasz Wicherkiewicz and Werner Winter)*, 1414 pp., Berlin-New York: Mouton de Gruyter (2011)
Inoue, Koichi, “F. Boas and an ‘Unfinished Jesup’ on Sakhalin Island. Shedding New Light on Bertold Laufer and Bronisław Piłsudski.” In: Laurel Kendall and Igor Krupnik (eds.), *Constructing Cultures Then and Now. Celebrating Franz Boas and the Jesup North Pacific Expedition*, pp. 135-63, Washington: Arctic Studies Center, American Museum of Natural History, Smithsonian Institution (2003)
Latyshev, V[ladislav] M[ikhajlovich], *Сахалинская жизнь Бронислава Пилсудского. Прологомена к биографии* [Sakhalin period in the life of Bronisław Piłsudski – prolegomena to a biography]. Yuzhno-Sakhalinsk: Sakhalinskoye knizhnoye izdatel'stvo (2008)
Lindquist, Ivar., *Indo-European Features in the Ainu Language with Reference to the Thesis of Pierre Naert*, Lund: C.W.K.Gleerup (1960)

- Majewicz, Alfred F., *Dzieje i legendy Aynów* [history and oral traditions of the Ainu], Warszawa: Iskry (1983)
- Naert, Pierre, *La situation linguistique de l'ainou I. Aïnou et indoeuropéen*, Lund: C.W.K.Gleerup (1958)
- Philippi, Donald L., *Songs of Gods, Songs of Humans. The Epic Tradition of the Ainu*, Tokyo: University of Tokyo Press (1979)
- Piłsudski, Bronisław, *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*, collected and prepared for publication by Bronisław Piłsudski, edited under the supervision of J[an] Rozwadowski, PhD. Cracow: Imperial Academy of Sciences (Spasowicz Fund), “Spółka Wydawnicza Polska,” xxviii + 242 pp. (1912). Reprinted several times, also in CWBP 2, 1–272; Russian translation by Valeriy D. Kosariiev „Материалы для изучения айнского языка и фольклора” (only the introduction, bibliography, commentaries, and English texts translated) in *Краеведческий бюллетень* 1, 56–89; 2, 80–104; 3, 158–83 (1994); and (complete, with Ainu-language texts) in *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского* 7, 26–205 (2004). Japanese translations: Wada 1943, Chiri 1944, and Piłsudski 1983–92. Polish translations of 15 (out of 27) texts in Majewicz 1983.
- Sawada, Kazuhiko and Kōichi Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vols. 1–2, 1024 pp., Saitama: Saitama University (2010)
- Sieroszewski, Waclaw, „Wśród kosmatych ludzi” (1926) [‘among hairy Ainu’; it was printed in instalments simultaneously in three newspapers: *Czas* in Cracow (№№ 228–238), *Świat* in Warsaw (№№ 41–46) and *Wiek Nowy* in Lemberg~Lwów (№№ 7589–7615), subsequently published separately in a book form in 1927, 1934, 1934, 1938, 1959 and in vol. 18 (*Szkice podróżnicze. Wspomnienia*, pp. 219–74, Kraków: Wydawnictwo Literackie, 1961) of a 22-volume edition of Sieroszewski’s „Works” *Dzieła*; as early as 1927 a Czech translation was in print (*Mezi chlupatými lidmi*. Praha: Nakladatelství Pokrok). For the English-language edition with commentaries and illustrations entitled „Among Hairy People – a 1926 account on Waclaw Sieroszewski and Bronisław Piłsudski’s expedition to the Ainu of Hokkaido in the summer of 1903” see CWBP 3, 646–99, 791–801, 819; a Russian translation based on it, entitled „Среди косматых людей,” appeared in *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского* 8, 46–88 (2004); recently completed Japanese translation by Koichi Inoue, included in this book.

* Author & title: A.F.Majewicz, “Why? Unveiling a monument to B.Piłsudski in Shiraoi.”